

## ヘロデの死 / 人間崇拝の禁止

教会を迫害したユダヤの王ヘロデ・アグリッパ1世がカイサリヤで急死した事件は、同時代のユダヤ人歴史家ヨセフスの記録によっても実証されている。

ヨセフスの「ユダヤ古代史」によれば、アグリッパはヘロデ大王が建設した劇場でローマ皇帝を祝して最大な祝宴を催した。祭りの二日目に、彼は全体が銀でおおわれた豪華な衣装をまとい劇場に入ってきた。朝の光りがその衣装に当たると、まばゆいばかりに燦然と輝き、人々は恐れおののき、彼を神と呼んで、恵みと祝福を求めた。王はその賛辞を退けなかった。その時、腹に激痛が襲い、彼は急ぎ王宮に運ばれたが、五日間もたえ苦しんだ後、ついに死んだといふ(IX.8.2)。

突然彼を襲った激しい腹痛を、或る医者はさなだ虫の嚢胞の破裂による激痛ではなかったかと言う。医学的にいろいろ説明できるとしても、これは、ルカによれば、自分を神格化する人間の傲慢に対する神のさばきであった。人は人であって神ではない。一介の人間に過ぎない者が自分を神とすることの恐ろしさ！ この人間の傲慢に対する神のさばきをここに見るのである。

人間の歴史は、自分を神格化し、栄光を求め、崇拝と絶対的服従を要求する権力者たちの罪の歴史である。古くはローマ皇帝礼拝から最近の共産主義体制下の支配者崇拝に至るまで、巨大な像が造られ、まるで神のごとくに崇拝と服従が要求された。

聖書はそのような人間崇拝をきびしく禁じる。「十戒」の第一戒は言う「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」。第2戒は言う「あなたは、自分のために、刻んだ像を造ってはならない」。人間が人間を神とする。しかも一介の被造物にすぎない人間が自分を神と等しくし、礼拝と服従を要求する――これは神への挑戦であり、神の御前にこれ以上の罪はない。

聖書の人物たち(神のしもべたち)は、自分が神の如く崇拝されることを恐れをもって拒絶した。ペトロがカイサリヤの百人隊長コルネリウスの家に到着したとき、コルネリウスは彼を出迎えて、その足もとにひれ伏した。そのとき、ペトロは彼を引き起こして言った、「お立ちなさい。わたしも同じ人間です」(10:26)。

パウロとバルナバは、ルステラの人々がいけにえと花輪をもって来て彼らを礼拝しようとしたとき、衣を引き裂き、群衆の中に飛び込んで行き、叫んで言った、「皆さん、なぜこんな事をするのか。わたしたちとても、あなたがたと同じような人間である。そして、あなたがたがこのような愚にもつかぬものを捨てて、天と地と海と、その中のすべてのものをお造りになった生ける神に立ち帰るようにと、福音を説いているのである」(14:15)。

パトモス島で幻のうちに現れた御使いをヨハネが拝そうとしたとき、御使いは彼をとがめて言った、「そのような事をしてはいけません。わたしは、あなたたちと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい」(黙示録 19:10 22:9参照)。

ヘロデの死は、自らを神と等しくしようとした人間の傲慢に対する神のさばきであった。人間は人間であって神ではないことを心に刻みつけねばならない。崇めるべきは神のみであって、人間を崇めてはならないのである。